
2. 市場調査

(1) 漁獲状況調査と市場価格について

(橋本佳樹)

目 的

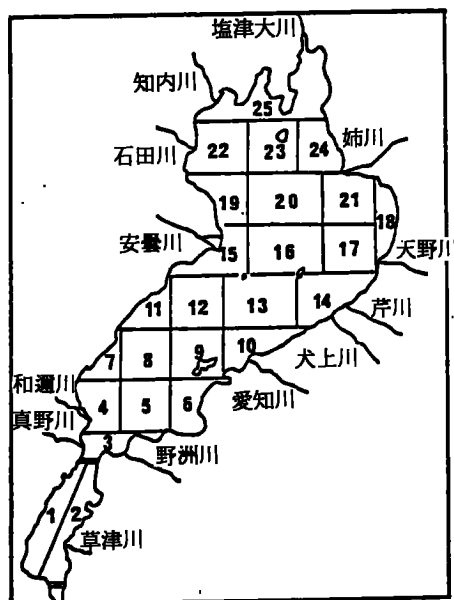
セタシジミの漁獲の現況と、市場動態の実態を把握するため実施した。

方 法

- i) 県内の貝採捕漁業者に対し、1989年8月1日より、図12に示した漁獲日誌の記載を依頼した。
- ii) 依頼した漁業者は、堅田漁業協同組合員4名、中主漁業協同組合員1名、近江八幡漁業協同組合員1名、彦根市松原漁業協同組合員3名、沖島漁業協同組合員1名の計10名である。

結果および考察

貝採捕漁業者が漁獲の対象にしている貝は、昨年報告²⁾した通り、セタシジミ、タテボン、マルドブガイ、イケチョウガイ、および巻貝のタニシである。一部の漁業者が、マルドブガイ等、セタシジミ以外の魚種を対象に漁獲しているが、大多数は、セタシジミの漁獲が主で、他の貝類は混獲される程度である。



水 揚 日	___月___日
桁網の大きさ	ヨコ___cm×タカサ___cm
ツメの有無	有 無
操 業 時 間	___時___分 ~ ___時___分
1 回あたり 曳 網 時 間	___時間___分

	個数 (個)	重量 (kg)	金額 (円)
シ ジ ミ			
マ ル ド ブ			
タ テ ボ シ			
イケチョウガイ			
タ ニ シ			
そ の 他			
今日の総水揚げ			

図12 漁獲日誌

調査した漁業者10人の8月から12月までのセタシジミの漁獲量は1人1回あたり、5～265 kgと個人差があり、5ヶ月間の総漁獲量は約42トン、水揚げ高は約1,233万円であった。表6は組合別の月別漁獲量と水揚げ高を示したものである。

解禁直後の8月は、需要が少く、また、産卵期後であり、貝の活力も弱っており、秋期や冬期に比較して、斃死しやすい状態なので、組合で自主的に漁獲制限している。その結果、漁獲量は昨年同様10月にピークに達した。

県下貝採捕漁業の中心的組合である、堅田漁業協同組合は5ヶ月間で約22 tを漁獲し、557万円の水揚げ高をあげている。

調査した、5漁協10人の結果から、それら組合の実働貝曳漁業者23人の5ヶ月間の漁獲量に換算すると、約96.6トン、28,360千円となる。5漁協以外に貝曳網漁業を営むものは、10人程度と思われることから、平成元年の県下全体のセタシジミ総漁獲量を推定すると、約249トン、73,240千円の水揚げとなる。なお、セタシジミ1 kgあたりの単価は、200～400円で平均318円で販売され、ほとんどが、地場消費であった。

セタシジミの潜在的な需要は、高く、雑誌等に掲載されると、各県から、幅広く問い合わせや注文が殺到している。各漁協が個々に、少数の仲買者と直接取引するのではなく、漁獲物を集中してコンスタントに出荷すれば、販路も広がり、ますます需要は高まると思われる。

次に、混獲されたその他の貝類について、出漁状況と、漁獲量を図13～16、表7～10に示した。

表 6 平成元年 8～12月分 組合別セタシジミ漁獲量と単価

組合	調査した 漁業者数	年度	8 月 分		9 月 分		10 月 分		11 月 分		12 月 分		合 計		単 価 (円/kg)
			漁獲量 (kg)	水 揚 高 (円)	漁獲量 (kg)	水 揚 高 (円)	漁獲量 (kg)	水 揚 高 (円)	漁獲量 (kg)	水 揚 高 (円)	漁獲量 (kg)	水 揚 高 (円)	漁獲量 (kg)	水 揚 高 (円)	
堅 田	4 人	'89	2,240	520,200	3,215	788,045	5,429	1,438,060	5,705.5	1,372,675	5,496	1,451,050	22,085.5	5,570,030	200～400
中 主	1 人	'89	348	111,360	565	180,800	691	219,740	549	164,700	618	185,400	2,771	862,000	300～320
近江八幡	1 人	'89	1,475	449,250	2,150	700,650	2,105	694,650	—	—	—	—	5,700	1,844,550	300～330
彦 根	3 人	'89	1,392	514,520	882	326,340	1,530.5	524,645	1,207.5	400,585	916	302,280	5,928	2,068,370	300～370
沖 島	1 人	'89	1,151.5	460,600	1,003.5	351,225	1,241.3	434,455	976.5	346,825	1,119	392,350	5,491.8	1,985,455	350～400
計	10人	'89	6,606.5	2,055,930	7,815.5	2,347,060	10,996.8	3,311,550	8,438.5	2,284,785	8,419	2,331,080	42,006.3	12,330,405	平均 318

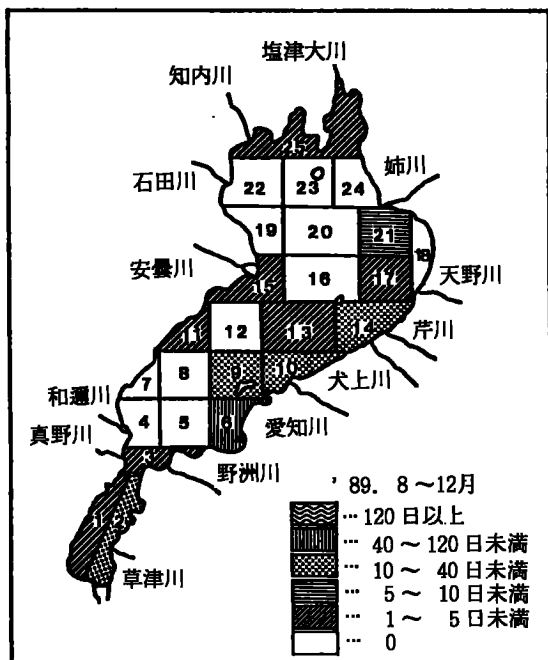


図13 タテボシ漁獲出漁状況調査

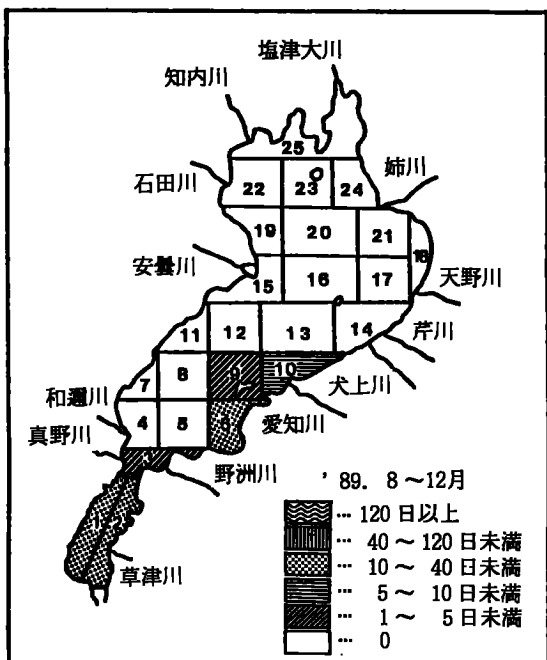


図14 マルドブ漁獲出漁状況調査

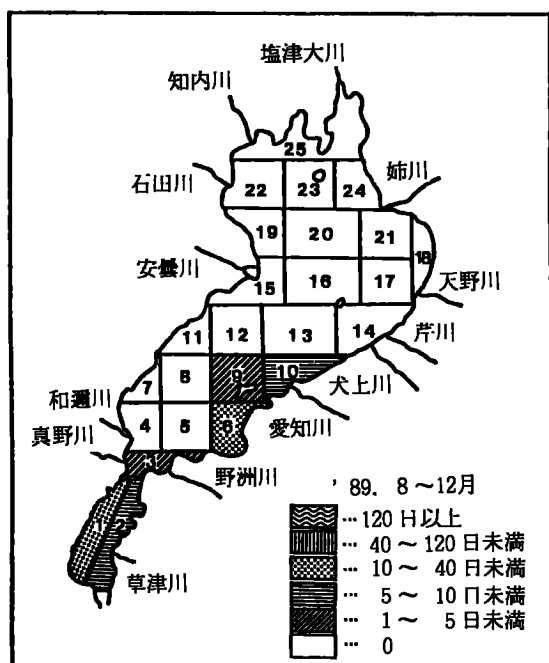


図15 イケチョウガイ漁獲出漁状況調査

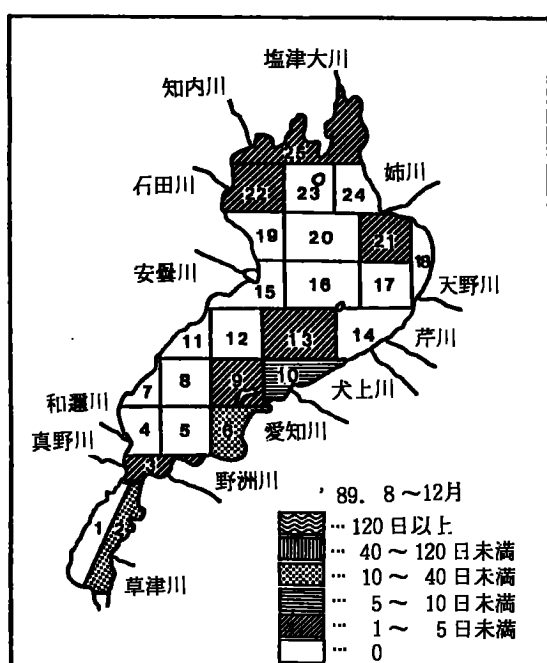


図16 タニシ漁獲出漁状況調査

表7 平成元年8～12月分

水域別タテボシ漁獲量（調査した漁業者数10人）

操業水域No	延出漁日数	漁獲量 (kg)	水揚げ高 (円)
1	4	182	45,500
2	31	1,286.1	369,325
3	4	80	19,484
6	48	1,236.5	296,425
9	34	584	193,750
10	22	210	39,790
11	3	31	9,300
13	1	7	2,100
14	19	147.3	52,788
15	1	10	3,000
17	1	23	6,210
21	7	270	65,350
25	1	23	6,900
計	176	4,089.9	1,109,922

表8 平成元年8～12月分

水域別マルドブ漁獲量（調査した漁業者数10人）

操業水域No	延出漁日数	漁獲量 (kg)	水揚げ高 (円)
1	16	1,495.5	342,750
2	11	700.5	173,570
3	2	4	800
6	26	109.3	21,860
9	3	14.5	2,900
10	7	115	28,050
計	65	2,438.8	569,930

表9 平成元年8～12月分

水域別イケチョウ貝漁獲量（調査した漁業者数10人）

操業水域No	延出漁日数	漁獲量（個）	水揚高（円）
1	10	34	
2	6	14	
3	2	2	
6	15	21	
9	2	3	
10	7	16	
計	42	90	

表10 平成元年8～12月分

水域別タニシ漁獲量（調査した漁業者数10人）

操業水域No	延出漁日数	漁獲量（kg）	水揚高（円）
2	1	1	1,500
3	4	7	8,800
6	30	38.6	52,080
9	3	8	10,400
10	8	16.5	21,550
13	1	22	33,000
21	1	2.5	3,250
22	1	15	22,500
25	2	24	36,000
計	51	134.6	189,080

タテボシは南湖のNo 2 と近江八幡市長命寺、牧地先のNo 6 に多く出漁しているが、昨年と異なり、南湖のNo 1 への出漁は少なかった。また昨年は出漁がなかったNo 9 の日数も多く、セタシジミの出漁日数に比例して、混獲が多いことが伺えた。5ヶ月間の総漁獲量は約4トン（延出漁日数196日）で、水揚高は110万円であった。

昨年度は、漁獲量、水揚高ともに、南湖の占める割合は、78%であったが本年は約36%と、南湖の占める割合が激減した。

マルドブガイは、南湖のNo 1、2 での漁獲が多く、5ヶ月間の総漁獲量は約2.4トン（延出漁日数65日）で、水揚高は57万円であった。そのうち南湖が全体に占める割合は漁獲量、水揚高ともに、約90%で、昨年同様高かった。

イケチョウガイが漁獲されているのは、昨年同様No 1、No 2 の南湖と、No 3、6、9、10の水域で、その他の水域では全く漁獲されていない。イケチョウガイを漁獲している組合は、堅田の漁業者のみで、5ヶ月間の総漁獲量は90個であった。

次にタニシは、セタシジミとの混獲で水揚げされ、総漁獲量134.6 kg（延出漁日数51日）18万円の水揚高であった。

このように、琵琶湖の貝曳漁業者は大半がセタシジミの漁獲にウェイトをおいて操業している。現在、休漁中の漁業者も、セタシジミ資源が復活すれば、操業を再開すると思われるので、そのとき、豊漁貧乏にならないように流通形態を整備する必要がある。